

子どもの森づくり通信

発行：NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク

J P子どもの森づくり運動
参加園月例会報
(2020年1月号)

〒146-0082 東京都大田区池上1-3-4 tel:03-5755-3213 fax:03-5755-3081
http://www.kodomono-mori.net mailto:info@kodomono-mori.net

「J P子どもの森づくり運動」とご縁をもちました方々に、
活動情報をお送りさせていただいております。ご意見など賜れば幸いです。

<今月の1枚>



おめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

写真は、昨年末にJ P子どもの森づくり運動にご参加いただいた

大阪市「茨田（また）第2保育所」さんの園庭です。

今回、ご寄稿いただいた「小泉造園」小泉昭男氏によって造園されたとのこと。

楽しそうな風景ですね。

(目次)

1. 特別寄稿
2. 地域での活動レポート

*どんぐり博士の育苗日記 (2020年1月号)

■「J P子どもの森づくり運動」とは

今、子どもたちは、高度な情報化社会の中でバーチャルな環境に取り囲まれ、本物の自然体験活動から遠ざけられています。

しかしながら、子どもたちは、変化に富んだ自然体験活動の中でこそ、五感を通じて豊かな感性や健全な環境意識、そして子ども本来の生きる力を育みます。「J P子どもの森づくり運動」は、NPO法人子どもの森づくり推進ネットワーク（「子森ネット」）が「日本郵政グループ」との協働体制で、全国の保育園・幼稚園・こども園を拠点に、一貫した森づくり活動を通じて幼児期の子どもたちに自然体験活動と環境学習の場を提供しようという全国運動です。

■「J P子どもの森づくり運動」運営体制

・運 営 : NPO法人 子どもの森づくり推進ネットワーク（「子森ネット」）

・特別協賛 : 日本郵政グループ

・主な後援/協力/連携団体

(公社)全国私立保育園連盟

NPO法人 富良野自然塾

(公社)大谷保育協会

(公社)こども環境学会

保育環境研究所ギビングツリー

国際校庭園庭連合日本支部

(公社)国土緑化推進機構

(一社)日本森林インストラクター協会



1. 新年特別寄稿

新年、はじめての「子森通信」をお送りします。J P 子どもの森づくり運動では、2020年も昨年につづき、これまでの活動に積み上げるミッションとして「園庭緑化運動」に取り組みたいと思います。わたしたちが提案する「園庭緑化」とは、**保育園、幼稚園、こども園の子どもたちが一日の多くを過ごす園庭を、単なる運動や遊戯だけでなく、多様な自然と環境の体験を提供するフィールドとして改善していこうという活動です。**取り組みでは、園庭に造作されるもの、配置されるものから考えるのではなく、まず、園全体で子どもたちにどのような体験を提供すべきかを十分に考えていただき、そのことを実現するために足りない「もの」や「こと」づくりから取り組む手づくりの「園庭緑化（改善）」を提案させていただいています。ただ、その活動意義を理解しつつも、なかなかその1歩を踏み出せない園が多いのも現実です。そこで今月号では、京都を拠点に、素晴らしい園庭づくりを实践されておられる「小泉造園」の小泉昭男氏に特別寄稿をお願いしました。年頭にあたり、皆様のより良き園庭づくりの参考になれば幸いです。

【特別寄稿】「命と遊ぶ園庭から観えてくる保育」 小泉造園 代表 小泉昭男氏

●身近な環境を変えることから見えてくる。

私は、保育園、幼稚園の園庭づくりをしています。と言ってもグラウンドや大型遊具を作るものではありません。園庭の多くは運動場を基本に作られています。年に一度の取り組みのために「真ん中は大きく開けて、子どもが走り回ること」を重点に、運動の出来る空間になっているところが多くあります。はたしてそれで子どもは満足しているでしょうか。子どもはどのような空間でも遊びを生み出すことが出来ます。まさに遊びの天才なのです。



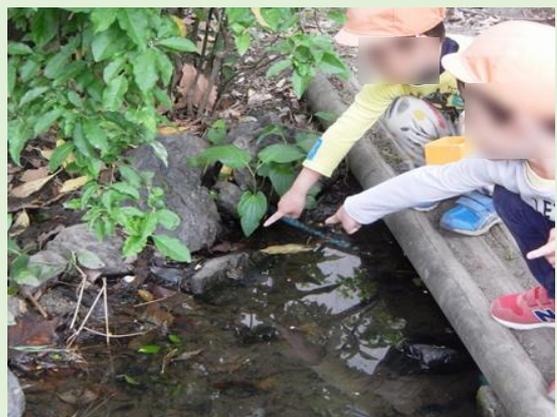
私は園庭管理をする中で、園庭は一番身近な自然と接する事のできる空間であると考えました。まさしく自然の入り口です。在来の植物は身近にある在来のものであることが重要です。珍しい観賞用の植物を植えても在来の生きものはやってきません。自然が少なくなったと嘆く方も都会には多くいますが、決してそうではありません。自然を見つける力が不足しているだけです。

●グラウンドではなく五感を感じるときすます空間

蝶は食草といって食べる草が決まっています。地域にあるものが一番蝶を誘発出来る事が出来るのです。

モンシロチョウは、アブラナ科の花にきます。ナミアゲハはミカンやサンショなどにきます。スマレにくるのはツマグロヒョウモンチョウです。花壇にチュウリップが植えてあっても蜜を吸いにはきますがそこに命の芽生えはありません。子どもにとって花壇の花がきれいなのは情操教育にはいいかもしれませんが、不思議だな、何故だろう、おもしろいなどという好奇心まで誘発することは出来ません。みてるだけ、さわったらだめ、そのような花壇は子どもには必要はないと考えています。

さわって、匂いで、時にはなめてみて、五感をふるに動かす事のできる空間が今の子どもには大切です。





果樹も大事な要素です。果物屋さんで売られているものとは違い 自分で取る、そして食べる。季節を感じる事が園庭からできます。そして果樹には必ずほかの生きものがかわります。そのことを感じることを空間をつくりたいものです。

畑作りも同じです。畑は収穫を目的に作る場所が多くありますが私は違います。栽培というくりではなく、五感をフルに生かす空間です。収穫を求めているのは生業にしている方々です。子どもの畑は発見の場です。

実が大きくなることは虫が花粉を運ぶ姿から、草を取る作業からは土の匂い、甲虫の発見 ミミズの発見 葉につく虫のおもしろさ、いろんな事が体験できます。これは大きな畑でなくても、プランターでも体験できます。毎日子どもが接する空間にあることが一番重要なことです。子どもにとって収穫よりも大事なものがそこにはあると考えています。

●グラウンドでは味わえないおもしろさ

私の作る園庭は凸凹です。子どもは平らなところより凸凹の方が好きです。2歳ぐらいになると子どもは歩道より縁石の上を歩きます。これは、みてくれ、こんなところも歩けるんだといいたげです。小さな築山を作れば子どもは走るときに体を斜めにして横切り、走りだしたり、登るとき降りるとき、それぞれ体の使い方を「賢い体」で覚えて行きます。その凸凹に木が植えてあれば子どもは木に登りまたは虫を取り始めます。在来の樹木ですから必ず地域の生きものがきます。その生きものを観察する中で、子どもはいろんな事を発見します。

●子どもの目をドングリ眼に

園庭に出て、園庭で虫を捕っている子どもの目は輝いています。「瞳孔は興奮状態にあるときに開きます。好奇心に誘発されななだろうと思って手を伸ばしているときの子どもの表情は真剣そのものです」子どもの遊び研究会が報告していますように多くの子どもが園庭でわくわくしながらあそぶ姿をみたいものです。

●保育士の指導性

非認知能力といわれる力は、遊びが大切だと言われています。やる気 自信 忍耐力 計画性 協調性 粘り強さ これは、評価されない事柄です。遊びから生まれると言われています。園庭の大型遊具で遊んでいる姿を見たときに保育士は、遊んでいるなと思いがちです。しかし私の考えは、「遊具に遊ばされている」と思います。遊具遊びでこのような力が育つでしょうか。子どもは多様です。そのためには遊び空間も多様なものが必要だと私は考えています。子どもたちには自分の好きなことができる空間（環境）を考えてあげたいものです。子どもは自ら環境を選べないからです。

（＊写真提供：小泉昭男氏）

●著者紹介：小泉 昭男氏



1959年生まれ 小泉造園 代表

京都女子大学 保育内容演習（環境）非常勤講師

こども環境学会会員 日本保育学会会員 国際校庭園庭連合日本支部会員、他

（主な著書）「園庭大改造」ひとなる書房 「園の身近な生きものに会おう探検マップ」かもがわ出版、他 ＊全国で保育園 幼稚園の園庭を、五感を感じ、身近な生きものと出会える園庭を保育士とともに。造っています。

2. 地域での活動レポート

福井県「大野幼稚園」地域の植樹活動と自然体験学習

・日時：2019年5月19日（日）・場所：福井県大野市前坂キャンプ場・参加者：園児、保護者、教諭、卒園児約50名
 ・植樹本数：約40本 ・内容：植樹活動と自然体験学習「はじめまして わたしたちの木」（以下、園レポートより）
 色鮮やかな新緑のもと、植樹の前に『はじめまして わたしたちの木』をテーマに親子で自然体験学習をし、キャンプ場内で自分達
 が対話してみたい木を探し、「何歳なの?」「私達に言いたいことは?」など質問しながら、親子でゆったり「木」とお話しました。



●どんぐり博士の育苗日記(2020年1月号) ～今年の桜は早いか遅いか?～

大寒となりました。けれど、庭の冬枯れの草むらでは、スズメたちが柔らかな日差しを受けて、しきりに何かをついばんで、さらにチーチーと鳴き会っています。まさに春の風景です。

子森ネット森林インストラクター：河内和男（どんぐり博士）



今年の異常な暖冬に触れないわけにはいきません。今冬は、晩秋から早春へと季節が一足飛びし、寒の入りから立春までの、1年で最も寒い時期がすっぱり抜け落ちてしまった感じです。多分この1月の気温は、各地で観測史上1位かそれに準ずる暖かさとなると思われます。私の住む東北でも、大寒前後の日々なのに、毎日雨が降っています。

今年ほどの暖冬だと、植物や野生動物への悪影響が心配されます。身近なところでは、桜の開花です。これだけ暖かいとすぐ開花してしまいそうですが、桜が開花するには、ある程度の寒さによる休眠打破が必要です。けれど、西日本では、非常に気温が高い日が続いており、休眠打破が起らず、花芽の生長も進んでいないようです。場所によっては桜の開花が遅れる、満開になっても花の数が少ないさらに、花が咲かないということも起こりそうです。

日本の春の風景として当たり前であった桜の花が、暖かな地域から次第に見ることができない貴重なものになってしまうかもしれません。気候変動は、四季折々に繰り広げられてきた生活や文化も途絶えさせてしまうレベルまで進んできているかもしれず、私たちの生活や行事を、変動した気候に合わせていかなければならないでしょう。

ですから、どんぐりの育苗について、今までの経験通りではなく、異常な天候に対応して、苗の管理や、どんぐり拾いの時期のなどを変更していく必要が出てきそうです。